

---

# 護り屋

霊刀村雨丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
護り屋

【Nコード】  
N3341S

【作者名】  
霊刀村雨丸

【あらすじ】  
男は、何のために護り抜くのか。それは本当に護り抜きたい物なのか

(前書き)

このお話は作者の初めてのオリ小説です  
何か間違い誤字脱字が有ったら生暖かい目でみすごし感想で指摘し  
てくれたら嬉しいです

その男は歩いていった。

その男は道と言う道を歩いていた。

その男は目的があつて道と言う道を歩いていた。

その男は王国に行くと言う目的があつて道と言う道を歩いていた。

その男は無かつた。

その男は目的が無かつた。

その男は旅をしている目的が無かつた。

その男は生きていくだけで旅をしている目的は無かつた。

その男はあつた。

その男は名前があつた。

その男は自分で名乗る名前があつた。

その男は仕事をしているため自分で名乗る名前があつた。

ここはとある異世界の大陸。

文明が発達し、『魔法』と呼ばれる奇蹟を起こすことすら出来るようになった世界だ。

この異世界に存在する大陸はまだ誰も統一者がおらず、大陸の場所によって違うグループ、すなわち『地域』や『国』が出来ているのだ。例えば、南の方のとある地域では鉄工業が発達しているのに対し東の方では一時代遅れているのか独特な衣装を着ていたりする。さらに、住む地域が違えば住む『生物』も違うのだ。先ほどの例で行くと南は工業故暑さに厳しい環境でも生きることが出来、力のある蜥蜴族サラマンダーが住み、東の方では妖怪ようかいと呼ばれる人の形をした不思議な力を持った者たちが住んでいると言う。

かと言って、やはり一番生息しているのはヒューマン、詰まる所の人間である。この大陸の80パーセントはヒューマンで構成されている。

ヒューマン、それは文明が進み魔法が使える『人間』の事である。この異世界の人たちは十二歳ぐらいで魔法を使える能力が開花し、それぞれ得意の魔法が使えるようになる。得意の魔法は人によってさまざまだ。雷系統の魔法が得意な人もいれば水系統しか使えない代わりに凄く特化している人もいる。さらには治療魔法、自身強化魔法を扱う人もいる。

そんな大陸文明のある大陸にある一つの国、『シュドリア王国』に向かい旅する男が一人

「もうすぐ、『シュドリア王国』ですか。この大陸で五本指に入る

ほどの文明王国。噂によると結構統制されていて皆平和に暮らしているとか………」

その男は誰も連れのないのに丁寧な口調で呟いた。目の前には巨大な城壁がある。歩いている内にたどり着いたのだ。

「……平和ですと、本業は出来そうに有りませんね……物の売買で済ませましょう」

そして自分の腕をちらつと見てそのまま城壁にある詰め所に入ってしまった。

門番兵は今日入って来た男のログを見返していた。

「ようこそ我が国、『シユドリア王国』へ。名前をお聞かせ頂きましたい」

『……本名は当の昔に忘れましたが、しいて言えば『護法』』

です……』

「『護法』ですか……まああまり深くは詮索しません。見た感じ、お若いですね」

『……ええ、まあ。一応十八歳です』

「十八歳……その年でよくこの道中を無事に過ごせましたね。感動です。では、今回はどのような目的で入国されるのですか？」

『……私が聞いた中ではとても文明が発達した国だと聞きました。ですから、観光などで十日ほど』

「いやあ、有難う御座います。しかも旅人さんは運がいい。五日目か六日目に『聖夜祭』をやるんですよ。では少々書類を作るのでお待ちください……」

『楽しみです。分かりました』

〈数分後〉

「お待たせしました……一つ、最後に忠告が」

『何でしょう？』

「実は……最近少々治安が悪いようですね……まあ気にすることはありません。もちろん魔法は使えるんですね？」

『……………ええ……………まあ……………ではこれで』

「……………？……………あ、行ってらっしゃいませ」

門番は何故魔法に関して聞いた時に言葉を濁したか分からなかった。

「……………これは何とも……………凄いな」

一言でいうと、凄かった。

道路は石畳になっており、きっちりと整備されている。公園では子供が駆けまわり、それを親が微笑んで見ている。向こうの店では声が聞こえて賑わっており、また別の方角では、

「あれが……………シユドリア城」

白い巨大な城が建っている。いかにも城と言う雰囲気建物だ。と言うか城。

しかし、見とれている場合では無い。まずは宿探した。本拠地を見

つけなければ話にならない。

「……安めの簡素な宿を探しに行きますか」

旅をしている以上、贅沢ぜいたくは出来ない。その男、護法は宿を探しに行動を開始した。

いろいろな人に聞きまわった所、不思議そうな顔をしながらも教えてくれた。たどり着いたのはごく普通の宿屋だった。宿屋に入り、十日間の宿泊の許可を聞いた所快く了承してくれた。今回泊まるのは式階の『式〇伍室』。中には簡素なベッドと鏡台、シャワーにトイレ、他一つの小さな机と一人暮らしで十分なセットだった。ベッドが意外と体に合う。しかしまず、

「シャワーです」

五日間体を洗って無かったのでまずは代えのシャツを取りだしシャワールームと共同になっている洗面台にバスタオルごと置く。シャワー十分程度浴び、全裸で出てきた。体つきは結構良い。

「…………ふう、久しぶりのお湯でさっぱりします」

そう吹き替えのシャツを取り着替える。その後、荷物の整理をすることにした。今の時刻は夕日が落ちるか否かあたり。もう外出はしなくて良いだろう。すると言えば夜風に当たるぐらいか。

程なくしてドアがノックされた。どうやら夕食の時間である。護法は、荷物の整理を中断し部屋を出て下に降りて行った。

夕食は肴さかなの煮つけとコメと呼ばれる暖かい物にみそ汁だった。コメは美味しかった。

どうやら自分しか泊まっていないようだ。夕食を作ってくれたおばさんも久しぶりで腕が鈍ってなきやいいねえ、など言いながら作ってくれた。

一応荷物の整理は終わり、明日あした明後日あさって売るものと買う物をメモに書き売る物に関しては纏めておいた。今日は疲れたので早く寝たい。そう思った護法はベッドに入る。たちまちに睡魔が襲い掛かり、眠りだした。

護法の朝は早い。朝日が差し込む前に起きる。

「……………ん、んんん……………」

護法は起き寝ぼけ眼でシャワールームに向かう。シャワーを十分程度浴び出てきた。

いつもの服に着替え、護法は外に出る。朝の日課だ。

護法は仕事をしている。自分では『護り屋』と呼んでいた。これは、依頼を受けた護法がその物を護り切るという仕事である。大抵は『訳アリ』な物を護ったり、王様を荒れている国から脱走させる際に協力したりして王を護り切ったりする仕事である。

この世界に置いては魔法が使えるので、もしかすると銃弾より危なかったりする事があるため、このような仕事をやって行ける人はそうはいない。しかし、護法はあえてこの『護り屋』の職業を選んだのだ。

何故なら、護法は一切の攻撃魔法が使えない代わりに防御魔法、すなわち障壁や隠蔽工作、結界を作ることに長けていたのである。そ

れ故『護法』と名乗っているのである。

「……………展開、護法障壁『隠』」

その声と共に護法は姿を消した。隠蔽魔法である。

「……………解除」

その声と共に護法は姿を表す。

その後、幾度か障壁の訓練をした所で部屋に戻った。

朝ご飯を食べ終え、洗濯機を貸して欲しいと求めた所無料で貸してくれたので洗濯した。無料とはいいい響きである。そんな事を終え、宿の店主に昼外出するのでご飯の準備はいらぬ旨を伝えて昨晚まとめた荷物を持ち宿を出て行った。

店では気前の良い店主が前に滞在していた国で買ったブローチに大

変興味を持ったようなので取引した所上手く元値より高額で買い取らせる事に成功した。他色々な物も順調に売り、この国特有のアクセサリーも結構買えたので一石二鳥であった。

「……いいですね……この雰囲気は……自分の故郷と大違いだ」

昼盛りの公園のベンチで一人呟く。

護法の故郷は、魔法が物を言う世界だったので攻撃魔法が使えない自分にとっては拷問の空間でしか無かった。殴られ、飛ばされ、斬られる。そんな生活を毎日送っていたから自然と身を守る技を覚えたのだ。そして一八歳、その国で大人とされる年で護法は国を捨てた。

「ほう、その話、ちよいと儂わに聞かせてくれんか？」

いきなり声を掛けられたのでハッと前を向く。そこには杖をついたおじいさんが居た。話を聞かれたら返すのが礼儀である。護法は、

おじいさんに隣の席を勧め、座った所で故郷を話した。

話を聞いたおじいさんの顔は驚愕に満ちていた。どうやら自分の故郷の現状に驚いたようだ。試しにおじいさんにその当時の傷を見せた所、

「少年よ、この世界には辛い事もある。しかし、それと同じぐらい楽しい事もあるのじゃ。頑張れよ」

真剣な眼差しで肩を叩いてどこかに行った。護法は見送った

そんなこんなしてる内に夜になった。夕飯はすでに済ませており、店主に夜の外出をダメ元前提で願ったところ、

「あーアレだ。この店の鍵渡しとくから外出していいよ。寝てるから」

……まあ凄い店主。店の鍵渡しされちゃったよ。そう言うこと

なので夜に外出する事にした。

護法はあても無く夜の道をふらふらと歩く。夜空が綺麗である。

ふと小道に入りたくなつたのでその気分逆らうこともせず入って行つたところ、

「おいおい、兄ちゃんこんな夜中に散歩なんてよオ、運がついてねえなア」

「クツクツク……こいつ旅人だぞ。金目の物持ってんじゃあねえの？」

「ほう……」

不良に絡まれた。しかし、夜だと言う事もあって魔法は使つて来ないらしい。優しい不良、略してやりよう……

「おい兄ちゃん、今ならアやすくすつから、金目のモンだしな」

「クツクツク……」

「さつさと出せ……」

「……お断りします」

見た感じ敵では無さそうなので普通に喧嘩腰で断る。案の定、

「…………やれ」

冷酷な宣告を下された。二人の男はボウガンを向け、躊躇い無く撃つて来た。躊躇いが無い事から結構やる不良だと判断。しかし、こんな事護り屋にとっては朝飯前。障壁を張るまでも無い。

「狙いが甘いですよ」

そう護法は言い身を半歩ずらしてかわす。その際に前に体重を預けたのでそのまま加速。ボウガンを撃った男の脇腹を殴り不良一人目が沈黙。その勢いで足を延ばし二人目を蹴り込んで沈黙させた。

「…………まだ、やりますか？」

護法はにこやかに問う。最初に喧嘩を売って来た男は恐怖に顔を歪めて逃げて行った。

護法は倒れて意識の無い二人を小道の、さらに見えにくい所に移動させ宿に帰った。二日目の話である。

三日目と四日目は何事も無く過ごすことが出来た。最近この有名な不良が力仕事のバイトをするという噂が流れているが、はて、誰のせいだろうか？

さて、今日の店は凄い賑わっている。何と云っても今日は年に一回の『聖夜祭』だ。否、『聖夜祭』らしい。今日は宿の店主も買い物その他もろもろで店空けるから閉めるとか言っていたので外出中である。

『聖夜祭』。それは年に一度この国の存続を祝って行う大きな祭りだ。昼間は店などが大サービスでやっており、夜は丸太を組んで火を燃やすらしい。昼間はどこ行っても大賑わいであった。ちゃっかかり護法は店で名物の『スーパトリマルヤキプレート』、略して『STG』を頼み、あまりの大きさに驚愕半分呆れ半分で食べ切った。その後十分間は食い過ぎで動けなかった。どうでも良いが、照り焼きなので美味しかった。

店を出て、護法はこの国の城の近くまで行って見た。改めて、この城を見ると大きい物である。

「建設に、どれぐらいかかったんでしょうか？」

そう一人つぶやく。その返答は勿論帰って来なかった。

「・・・・・・・・」

城の窓、旅人を見ていた二十代前半の女性が一人。その眼は哀愁を感じさせた。

そして夜。

国の真ん中にある広場では丸太が組まれ、今火が付けられた。盛大に燃え上がるは火の鳥の如く。

『わあああああああああああああああああー！』

国の人たちが出て来て皆で声を上げて祝った。護法もそれを祝った。国の人はこの火の前で踊ったり原っぱに座って眺めたりカップルといちやついたりしている。

広場の周りには屋台が並んでおり、フランクフルトや焼きそば、お好み焼きやたこ焼きなど。さらには金魚すくいや御神籤おみくじまである。

護法は近くのベンチに座ってたこ焼きを食べていた。

「…………ふむ、美味しい…………」

「そうですね？」

「ツ…………ゲツホゲツホ…………」

「え！？あ、大丈夫ですか!？」

いきなり自分の返答が返って来たので驚いてむせてしまった。隣の女の人が背中をさすってくれたのでマシにはなった。

「す、すみません…………驚いてしまったので」

「いえいえ、こちらこそ…………いきなり声を掛けてしまって…………」

そして二人はお互いに遠慮して、小さく笑った。

「こんばんわ。五日前に来た旅をしている者です。『護法』とでも呼んで下さい」

「ええこんばんわ。私はアリシアです。お見知りおきを……」

その女はアリシアと名乗った。見た目は二十代前半、恐らく自分より年上だろう。長い火の光に輝く金髪を持った美しい女性であった。

護法はアリシアと話をした。自分の前に居た国の話や護り屋の話をした。アリシアはその話を聞いてくれた。楽しかった話には共感して、辛かった話は慰めてくれた。

護法が一通り話を終えると、今度はアリシアが話してくれた。この国の成り立ち、最近の出来事など面白可笑しく話してくれた。それから幾許かの時間が過ぎ、ふとアリシアが、

「ねえ……あの火の前で踊りませんか？」

「……え？僕たちですか？」

「それ以外誰が居るんです？」

「……そうですね。これも何かの縁、踊りましょうか」

「ええ！」

「あ、ちょ、」

そう言つて、アリシアが護法の手を引つ張つて行く。二人は燃え盛る火の前に近くまで来て、向かい合つて踊りだした。

初対面なのに息が不思議と合い、優雅に踊つた。それはまるで舞う蝶の如く。

護法とアリシアは有意義な一時を過ごした。

誰も、彼女の正体など知らなかつたのだ。

誰も、これから起こる事など知らなかつたのだ。

護法は部屋で考えていた。今日の夜、であつた女性の事だ。アリシアと名乗つたあの女性の事だ。彼女と踊り終え、別れる際に部屋の

番号を聞かれたので答えたが、何故自分は答えてしまったのか。

確かに、この平和な国で護り屋の職務を遂行する必要はないだろう。にもかかわらず、自分は必要最低以上の事を教えてしまったのだ。普通ならばこんなことは有りえない。

「……………今日は、もう寝ましようか……………」

護法は呟き、布団に入る。今日ばかりかはベッドが身に合わなかった。少年はそのまま苦悩し、やがて眠りに落ちた。

その感情は、『恋』と呼ばれる物であった。

聖夜祭が終わって二日、『シュドリア王国』を訪れて七日目が来た。特に何もすることも無く、公園の子供達、正確には四人の子供と帽子を被った小さな蜥蜴族サラマンダーに有翼族フロレンの少女と触れあってそのまま時間が過ぎた。

「兄ちゃん、またね！」

「ええ、また」

子供たちは夕方五時になる国の曲が流れたところでそれぞれの家に帰って行った。そろそろ日が沈みそうなので護法も戻る事にした。

宿に戻り、野菜の味噌炒めと魚介類チャーハンの炒飯と言う炒めコンボの夕飯を頂き、部屋でぼーっとしていた所だ。

コンコンコン

不意にドアがノックされた。さて、どちら様だろうか？『護り屋』は裏では意外と知られているらしいので依頼でも来たんだらうか？とりあえず今は全裸でも何でも無いので入室の許可を出す。

「どひぞ」

そう言って僅わずかな間を挟んでキーツとドアが半分開き、

「こんにちわ」

昨晚の女性、アリシアが顔を出した。ああそう言えば部屋の番号教えたな、と思い出しながら手招きをする。

「どうぞ、お入り下さい」

「それでは失礼します」

彼女は部屋に入って来た。服装はワンピース。夜にしてはちょっと寒い格好である。

「外は寒かったですでしょう？今からお茶でも入れますね」

「そんな、お気になさらず……」

「いえいえ、わざわざ来て下さったんですからこれぐらいどうってこと無いです」

「……じゃあ、お言葉に甘えて……」

アリシアは近くの席に腰かけた。護法はお湯を沸かし、前の国でもらったお茶のパックを入れる。数分して程よい色になったのでアリシアの座っている椅子の前のテーブルに差し出す。

「このお茶は前の国で貰った『煎茶』せんちゃと言い、独特の苦みと香りが特徴です」

「へえ、異国のお茶ですか……」

護法は自分のカップを鼻に近づけ、香りを軽く味わった所で口に含む。治安の悪い国でのお茶を共に楽しむ時はまず入れた人が先に飲み毒が無い事を証明するのがマナー。普通に毒殺も有りえるからだ。

「……では私も……」

そう言いアリシアは護法の真似をし、そして一口飲んでみた

「ふう……美味しいですね」

「そうですか。自分もこれは気に入ってるんですよ」

二人は何も喋らずにお茶の一時を過ごす。時間が経ち、不意にアリシアが立ち上がって窓の近くに移動する。護法が疑問に思っていると、アリシアは窓に手を掛け訥々と語りだした

「……貴方は……約束された未来をどう思いです

か？」

「……………約束された未来……………」

「……………生まれた時から何をしなければいけないか決まって、決められた通りに生きる。そして、決められた結末を迎える……………  
・そう言う事です……………」

「それは、縛られて良いとは思えません」

護法は話の流れが？<sup>つか</sup>めないので自分の思った事を伝えた。

「……………そうですか……………」

「……………一体なぜこんな話を？」

アリシアは一瞬躊躇った。が、すぐにその理由を呟いた。

「私の本名は……………」  
『アリシアント・ニリスルード・シユド  
リア』……………」

「……………まさか、」

「そう……………私は第十八代の王族生まれの姫です」

「……………」

アリシアの衝撃的な発言に護法は黙ってしまふ。

「聖夜祭など、そう言う祭りでは身分を隠して参加する事が出来ません。何時もが一番上の階層の窓のある部屋で眺めてましたが、今日は、お父様とお母様に無理を言っ来て、今日だけ許可を貰いました。……もっと貴方とお話してみたかったです。外の世界の話……」

「……そう、ですか……」

「……私も、見てみたいですね……この城壁の外の景色を……まだ見ぬ新天地を……その夢は叶わないですが……」

「……」

「私は……護法さん、貴方と話が出来て光栄に思います」

「……こちらこそ、姫様とお話出来るだなんて……」

「……では、私はこれで」

「ええ……」

そう言って、アリシア、もといこの国『シュドリア王国』の姫様は部屋を後にした

「・・・・・・・・ツ・・・・・・・・」

護法が声を出そうとしたが、それは喉の下に押し込まれて声にならなかった。

そんな事を聞いたからってただ毎日が変わるわけでも無い。日は昇り、沈んで行く。そして日はまた昇り、再び沈む。そんな無意味な日々は皮肉にも一日が長く感じられた。

「・・・・・・・・」

何故だろうか？護法は、あの事実を知ってから何かとやる気が失せて来た。周りが、無意味な物に見えて来た。

たかが一人の女如きにそんな事を思っては仕事に支障が出るのでいっつもはそんな感情は抱かないはずだった。

「・・・・・・・・あ」

ハツと窓の外を見ると深夜、望月の一步手前の月が南中していた。季節が違えば『待宵』とでも言うのだからか。そんな時間まで思考に費やしていた事に護法は自分自身に驚いた。そして、布団を被った。

ザ・・・・・・・・ザザ・・・・・・・・ザザザ・・・・・・・・

「（・・・・・・・・こちらA班。現在裏出入り口から侵入。裏で手を回した奴と交代する。）」

「（・・・・・・・・こちらB班。T e s . 了解した。こちらは武装点検中だ。）」

「あーC班・・・・・・・・あ、インカム入れてねえ・・・・・・・・（あーこちらC班。電気制御かんりよー。停電はいつでも起こせるぞー）」

「（・・・・・・・・よろしい皆。今こそこの生ぬるい国家体制を覆し、くつがえ新しい国家を作るのだ。良いな。健闘を祈る）」

その通信は誰にも傍受されなかった。

そして宿泊から九日目。何時もの如く、今日も目的も無くふらふらしている……訳では無かった。

明日は出国の日だ。それに備えて護法は荷物を確認し最終点検をしていた。今はこの先の土地の環境を調べてそれを元に買う物を洗い出して購入中である。

「そうですね、保存が良い物を下さい」

「そうだねえ……『するめいか』なんてどうだい？」

「……スルメイカ？」

「そうだよ。鳥賊いかの足をこつ、保存良くしたものなんだ。意外と美味ぞ」

「……成る程、ではそれを二つほど」

「あいまいどありー。ちよいと待っててな」

さて、保存食も携帯食料もマッチも買ったので買う物が無くなった。目的が無くなってしまった護法は何時もの如くフラフラと町の中を歩きだした。

時刻は六時五十五分。

「（……………こちら司令。現状を開始せよ！）」

「（A班、Tes!）」

「（B班、Tes!）」

「（あーC班Tes.）」

その通信は開始の合図を送った。

賑わっている酒場の中。

「いやだからあそこのバーの女の子がすっげえ可愛くて……」  
「？」

「いやあのレストランの有翼族フロレンの子の方が……ん？」

バチン！と言う断線する音が聞こえたと思うとたちまちに停電した。  
店の中は騒然。

「おい店主！どうなってるんだよ！」

「ちょっと！誰アタシの服引っ張ったの！？」

「あつれ俺たちの席どこだ？」

実際の所、店主が一番慌てていた

「み、皆様落ち着いて下さい！わ、私にもわかりません！えー、皆が騒ぐとパニックになり騒動が起きては困るので落ち着いて下さい

「!

同刻、商店街ではパニックに陥ってた。電燈一つ付いてないので真っ暗である。どやがやしていた。

「あー？停電か？」

「そのようですね」

同刻、宿の吉階で夕飯を食べていた護法と新聞を呼んでいた店主の会話である。その時、護法は不意に嫌な予感を感じた。その不安の衝動に駆られて店主が護法の行動に驚いてる事を気にせず走って外に出る。

護法が宿から出て行って数秒、店主には巨大な音が聞こえた。

「……………そんな！」

外で護法が驚愕の声を上げている。見た物とは

城から、煙が至る所から吹き上がっていた。爆発音が聞こえる。

「……………ッ！」

気づいたら、護法は全速力で走っていた。煙の吹き上がる城に向かって、全速力で走っていた。何故だかは護法にも分からない。けれど、何かの衝動に駆られて全速力で走って行く。そのスピードはあたかも豹の如く。

程なくして、城の城門に着いた。誰かがこの城門閉鎖魔法をハッキングし、データが書き換えられた跡があった。この手の魔法は出来るが、

「時間が無い！」

諦めて別のルートを探す。城を周っていると見えにくい隠し扉を見つけた。魔法で熱探知を見ても使われた跡が有る。

「……………ここですか！」

迷い無く護法は城内部に入ってしまった

城内部。護法の目測によると爆薬などを使って無い事から炎系爆発

魔法を使える奴を配置し、同時に爆発させたと見る。護法は必死に城内を走って行く。しかし、

「なんだあいつは……！？侵入者だ！！直ちに確保、最悪殺せ！！」

「……クソッ！」

珍しく悪態を付き、障壁を展開。炎系統の魔法を防ぎながら相手に接近して殴打。確実に黙らして行く。

見つかった一人を無効化して突き進んでく。しかし、幾らたっても目的の部屋は見つからない。

「どこなんだ！！」

そこで護法は初めて気づいた。自分は、アリシアを助けるために潜伏したんだと。そして、自分を動かす原動力となる『もの』が分かった気がした。しかし、その名前が分かる前に、

バゴン！

奇妙な音を立てて天井が崩壊した。護法は緊急的に

「障壁、堅！」

天井に障壁を展開。何とか抑え込んだ。しかし崩れるのも時間の問題だ。

「急げ……どこなんだ!」

ふと、アリシアとの会話を思い出す。

「何時もは一番上の階層の窓のある部屋で眺めてましたが、今日はお父様とお母様に無理を言っ」

「……一番上、最上階一步手前の部屋があるフロアか!」

声に出すより早く足は動き出した。目指すは最上階一步手前。すなわち五階である。

途中で残兵と戦闘になり、思ったより手こずった。回復兵が居たの

である。しかし、その危機を乗り越えて五階にたどり着いた。

「……………どこなんだ!!」

ああなんと言う事だろう。無情にもドアが大量に有り、床も抜けている所がある。

そして、この建物自体が揺れだして来た。基盤が緩んできたのである。

「……………マズイ……………何とかしなければ……………ッ!  
!」

手当たり次第に扉を開けて行く。しかしどれも何も無いか、憲兵の死体ばかりだ。おそらく憲兵すり替えの際に口封じに殺したんだろう。護法は焦っていた。護法は時間と戦っていた。焦り故、落とっていたのかもしれない。

「……………ッ……………」

近くから、かすかな声が聞こえた。護法は、かすかな声を、確かに聞いた。

「!……………」

爆発音が鳴る中、心を鎮める。そして、

「・・・・・・・・ケ・・・・・・・・テ・・・・・・・・」

「右側三番目の扉！」

護法の勘がそう伝えた。瓦礫がれきを跳躍一つで飛び越え右通路三番目に値する扉を開ける。しかし、その部屋は護法が開けた中で一番悲惨な部屋となっていた。天井が崩れているのである。

「アリシア！返事をして下さい！」

護法は必死に瓦礫をどかし探していく。粉塵が舞い、天井の破片が音を立てて転がって行く。

「・・・・・・・・タ・・・・・・・・スケ・・・・・・・・テ・・・・・・・・！！・・・」

「！・・・・・・・・そこですか！！！」

護法は確かにアリシアの声を聴いた。その場所の瓦礫をどかして行く。そして

「アリシア！」

「・・・・・・・・・・か・・・・・・・・」

微かに意識の有るアリシアを発見、瓦礫の底から引き抜いた。幸い、大怪我などはしてないが圧迫による激痛で意識が危ない。

「アリシア！返事をして下さい！アリシア！！」

「・・・・・・・・・・くっ・・・・・・・・・・は・・・・・・・・」

なんとか意識は取り戻した。

「アリシア！気づきましたか！私です！護法です！」

「・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・ほう・・・・・・・・・・！・・・・・・・・護法さん！？・・・・・・・・  
・ぐっ」

アリシアが驚愕に満ちた顔で目覚める。足を軽く痛めてる様だ。

「護法さん・・・・・・・・どうしてここに・・・・・・・・」

「ええ、城が爆発してたので」

「……………そう……………なの……………ねえ……………」

「なんですか？」

「どうして……………こんな危険を冒おかしてまで……………私を助けに来たの……………」

「……………それが……………私にも分かりません……………ただ、城が爆発したのを見て……………気づいたら必死に走ってました。それで今に至ります」

「……………なんて無駄なことを……………！」

「……………え？」

「……………私なんかの為に……………自ら傷つくなんて……………！……………  
・貴方は……………旅人……………この国の事などで……………首を突っ込む義理は無いのに……………！……………もう、この有様から城が崩れるって言うのに！貴方が死ぬって言うのに！！！」

アリシアは泣いていた。自分の為に、人が死ぬのが許せなかった。

護法は、分かってしまった。

彼女は、言葉を求めている。

自分を救ってくれる、言葉を求めている。

説得されたいのだ。

護法は、崩れゆく城で、アリシアの背中に腕を通し、話した。

「……私は、依頼を受けた物しか護りませんでした。楽しく無い仕事ですから。……あの聖夜祭を覚えてますか？私は、裏では結構名が通ってるので、誰も話しかけてくれません。でも、貴女は私と話をしてくれた。私の、醜い話を文句も言わず聞いてくれた」

アリシアが黙って聞いてる中、どこかで柱が折れる音がした。

「……私に、隠して置きたかったであろう、王族の話もしてくれました。あの時は複雑な感情でした。今でも覚えてます。何か言いたかったけど、言えなかったあの感情を。……私は、」

・・・」

崩れる音が大きくなる中、護法は、決定的な言葉を放った

「私は、貴女を護り抜きたい」

話を聞いたアリシアは泣いていた。しかし、それは前の涙と違う。自分への罪悪では無く、護法に対する思いにだ。

「……なら、私から、依頼……否、お願いがあります……」

「何でしょう?」

アリシアは、崩れゆく城の中で護法の気持ちに答えた。

「私を、決められた『未来』から護り抜いて下さい……！」

そして、城は崩壊した。

そして、反王国軍によるテロは終わった。  
城を崩壊させ、王や側近もろとも生き埋めにしたのである。  
そして、今のその国はどうなったかは分からない。

「そろそろ休憩しましょう。さすがに疲れて来ましたね」

「ええ、ちよつと……ふう……」

ここは森の中。現在絶賛迷子中である。ずっと旅をしている人とテロ口が起こつた国からの旅人が一人ずついた。一人はフードつきのコートを着ている男で、もう一人は長い金髪を持った美しい女であった。男は全身傷だらけで、女は金髪を束ねて動きやすい格好にしている。

「確かに通つた跡があるんですけど……」

「……この森、本当に抜けられるか心配になって来ました……」

二人は木に寄りかかって休んでいる。男がバックから携帯食料を出

し、女に渡した。

「……………護法さん。いつ食べても美味しくないです」

「警沢は出来ないんです。我慢してくださいアリシア」

その男は護法と言う名を持ち、女はアリシアと言う名を持っていた。アリシアは我慢してそれを食べ、護法は普通にむしゃむしゃ食べている。

「はぁ……………早く次の国が見てみたい……………」

「うう……………」

アリシアの文句に護法がうなだれる。

そんなことも束の間。二人は同時に立ち上がり、踏まれている道に沿って歩き出した。

さて、次の国にはいつたどり着くのだろうか？

護法は思う。自分の傷は誇りの傷だと。

自分が、護り切りたい『物』を護り切ったのだから。否、まだ護り切っていない。

護法が受けた彼女、アリシアの依頼。それは、

『未来を護る事』

だ。まだまだこれから始まったばかり。

未来を護るために、今は未来に向かって進んで行くのだ。

その先に、沢山の希望の未来があることを信じて……………

(後書き)

靈刃村雨丸から護法村雨刃にユーザー名を変えて初めて投稿した作品です

……つて知らないですよねそんな事。

世界観が無駄に力を入れたせいで期待してがっかりした方も多いでしょう

……え？世界観普通？……スイマセン

ええ、ホントに後書きで何も書くことはありません。スイマセン

ではこの辺でサラダバーしたいと思います……ハイ、ギャグつまらなくてスイマセン

では、またどこかで

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3341s/>

---

護り屋

2011年10月8日01時17分発行